

# MIYATAKE KAZUTAKA'S AD INEXPLORATA

宮武一貴のアド・インエクスプロラータ 明後日の空へ

著／宮武一貴

大日本絵画  
DAINIPPON KAIGA



# MIYATAKE KAZUTAKA'S AD INEXPLORATA

宮武一貴のアド・インエクスプロラータ 明後日の空へ

著／宮武一貴

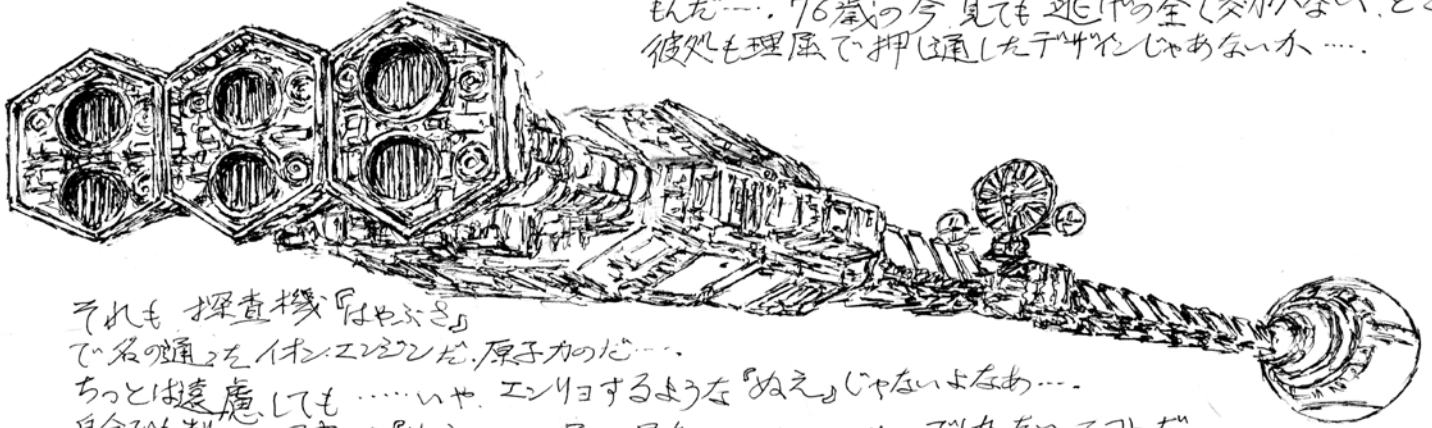
KAZUTAKA MIYATAKE

大日本絵画

DAINIPPON KAIGA

## 始まりの刻—2001年宇宙の旅・ディスカバリーが開けた扉—

うーむ。まあ……あのディスカバリー号を、10代も未の  
男れを知らぬ 只の若者でしか なかったとは言え  
よくも50数年前に描く気になって、俺も頭 描き上げちゃた  
んだ……76歳の今 見ても 逃げ物全(交力がない、どとも  
彼処も理屈で押し通したデザイナーじゃあないか……



それも 探査機『はやぶさ』  
で名の通ったイオンエンジンだ、原子力のだ……  
ちっとは遠慮しても……いや、エンリョするよな『ぬえ』じゃないよなあ……  
自分でも判っている事は『ぬえ』で、骨の屑まで『やれどや』でしかなくてコトだ。  
勿論、畏れを知らぬから、尊敬しないて訳じゃない、尊敬しないよな奴なら  
50年以上もデザイナーなど続けていなかっただろう……



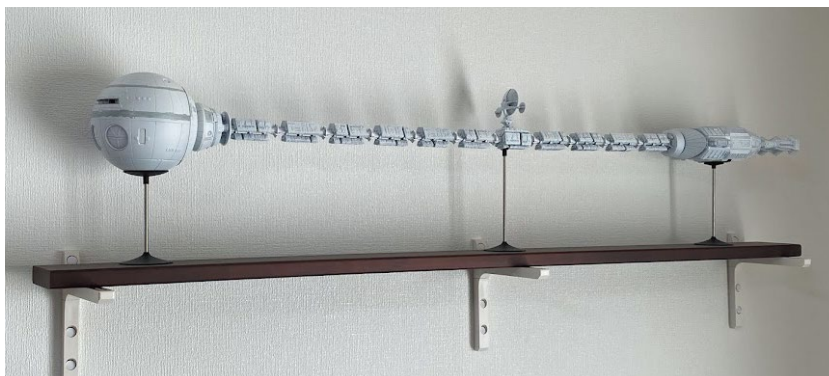
1968年、当時は新聞にカラー印刷が始まったばかりの頃。同じ商店街の付き合いで朝日新聞を取っていた。僕は東京教育大の受験に落ち一浪中。翌年は大学紛争で入試が中止となり、結局国立大へは入り損ねたんだが、そんな事はどうでも良くなった。要はその配達された朝日新聞の全頁カラー広告に、巨匠ロバート・マッコールの描いた『2001年宇宙の旅』のポスターが載っていたのだ。巨大で精緻な建造途上のスペースステーション5のドッキングポートからオリオンスペースシャトルが発進する大迫力のカラーアートに僕は圧倒された。SF作家アーサー・チャールズ・クラークの名ぐらいは知っていたが、スタンリー・キューブリック(当時の表記による)の名に全く覚えはなかった。大慌てで新聞屋に駆け込み、2001年のポスター画の頁を十部貰って来た。以後十数年間、ポスターは僕の部屋の壁を飾り続けた。映画が公開されると受験勉強も何もなく、テアトル東京へ飛んで行った。1968年、シネラマ映画館は京橋のテアトル東京と大阪のOS劇場だけだった……。

そこで僕の人生は決まった。植物学者への夢も一切が意味を失くした。ヒトザルが動物の大腿骨をポコンポコンやり始めるシーンでもう涙が零れていた。あとは何も話す必要はないだろう。要はスタンリー・キューブリックとアーサー・C・クラークの頭の薄いおっさん二人に見事やられてしまったのだ。後で特撮画面を思い返せば、軌道上の攻撃衛星など全部一枚のスチールを引っ張っただけでしかなかったが『ブルーダニューヴ』の曲と共にステーション5とオリオンシャトルがヴァルツを始めると、もうどうでも良くなってしまった。

そして全長二百メートルの巨大探査船『ディスカバリー』号には本当にやられた。その頃は純粋に只の憧れだけだった。後年、僕の本業となつていろいろ勉強し、不要め知恵も付けると見え方も変って多少は欠点が判るようになったが、それは些細な事に過ぎなかった。それでも五十年以上経った今も許せないのは、あの頃朝日新聞に載った2001年の映画評……『壮大なる見世物映画』とはナンだよ！ 全く故・赤瀬川原平師の言葉『アカイアカイサヒハアカイ(櫻画報)』に有る通りだ。近所だった新聞屋にはロバート・マッコールの恩は感じるが……。

……で『ディスカバリー』号。僕の方向違いの人生を動かしたのがSF大会『TOKON5』の盟友『松崎健一』との出会いだ。多くを語る必要もないが、彼がTOKON5アート部門責任者として展示した2001年映画スチールの全枚揃いを借り受け半年以上かけて分析し尽くしたのが、僕の最初の橋頭保となって呉れたのは言うまでもない。その後は『仮面ライダー・サイクロン号図解』を皮切りに『マジンガーZ図解』のTVアニメエンディングへと続き、今だに休む間がない。まあ『宇宙戦艦ヤマト』から『超時空要塞マクロス』や『聖戦士ダンバイン』に他にも色々やっているのだから……。総てはディスカバリーが開けた扉に始まっている。(正確には一人乗りのワンマンポッドで開けた先にはスペース・コリドーが繋がっているのだが……嗚呼、まだ手を付けていない発想を思い出してしまった。もう頭の中に「絵」は出来ているんだ……。 (あの作品へ続く。まだ企画中！)

(宮武一貴)



▲宮武のアトリエ壁面に鎮座するメビウスモデル 1/144 ディスカバリー号。精緻なディテールと全長1m強のボリュームが織りなす存在感は、お気に入りの一品。本コラム執筆の参考資料とモチベーションアップにと、非常に役立つこととなった



2001年宇宙の旅 ディスカバリー号  
(メビウスモデル 1/144)  
日本国内発売:2017年11月  
4万2680円(税込)  
現在は流通在庫のみ



▲映画『2001年宇宙の旅』を鑑賞後、受け取った熱量のままに宮武が初めて描いたディスカバリー号のスケッチ(1968年)。自宅の火災跡から無事発見され、少なからず因縁めいたものを感じさせる

# INTRODUCTION

イラストや小説、コンセプトデザイン、メカニカルデザインを通じて日本にSFという概念を根付かせたクリエイティブ集団「スタジオぬえ」。その創設メンバーのひとりとして、1970年代から半世紀以上にわたり第一線で活躍を続けてきた宮武一貴氏。本書は、航空機模型専門誌『隔月刊スケールアヴィエーション』にて連載中の人気イラストコラム「宮武一貴のアド・インエクスプロラータ 明後日の空へ」を一冊にまとめたものである。

本書の刊行にあたり、欠かすことのできなかつた存在がある。1970年代に『SFマガジン』（早川書房）でスタジオぬえのメンバーにより連載された「スターシップ・ライブラリ」だ。SF作品世界におけるメカニカルデザインの在り方を、イラストとコラムで提示した本連載は、「アド・インエクスプロラータ」の原型ともいえる重要な試みであり、両者はまさにカップリングされるべき関係にある。さらに本書には、1988年に『月刊コミックノイズィ』（大日本絵画）で連載された「アドバンスト・アップサラス」を、商業誌として初めて再録。大気圏外からの再突入をラリー競技になぞらえ、エンターテインメントとして昇華した宮武氏渾身の一篇が、時を経てよみがえる。

2020年代現在進行形の連載と、その源流となった伝説的連載二作を取めた本書は、氏が数多く手がけてきた版權イラスト集とは一線を画す内容である。そこにあるのは、宮武一貴というクリエイターの思考の軌跡そのもの。その一端に触れることのできる、極めて重要な一冊となるだろう。



## 宮武一貴

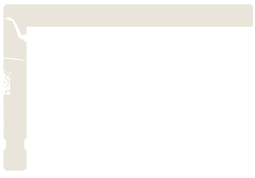
KAZUTAKA MIYATAKE

みやたけ かつたか 1949年生まれ。神奈川県横須賀市在住。メカニカルデザイナー、コンセプトデザイナー、イラストレーター。日本のSF界を牽引してきたスタジオぬえ創設メンバーのひとりで、大学在籍中よりSFアニメーション作品や玩具デザイン、内部図解イラストを手掛ける。科学のみならず生物や植物、建築などその知識は多岐にわたり、作品の世界全般を担う美術設定でも活躍。代表作は加藤直之氏と共同で生み出した『宇宙の戦士』（ハヤカワ文庫版）のパワードスーツ、『宇宙戦艦ヤマト』、『テクノポリス21C』、『超時空要塞マクロス』、『さよならジュピター』、『機動戦士ガンダム SEED FREEDOM』、『アーマード・コア』など

# INDEX

始まりの刻—2001年宇宙の旅・ディスカバリーが開けた扉—	2
<b>INTRODUCTION</b>	4
宮武一貴のアド・インエクスプロラータ あざつての空へ	7
VOL.01 ノースアメリカン XB-70 ヴァルキリー 隔月刊スケールアヴィエーション2022年7月号(通巻146号)	8
VOL.02 ノースアメリカン XB-70 ヴァルキリー その2 隔月刊スケールアヴィエーション2022年9月号(通巻147号)	9
VOL.03 コンベア F-102 デルタダガー その1 隔月刊スケールアヴィエーション2022年11月号(通巻148号)	10
VOL.04 ハニー・ウェスト or F-104 スターファイター 隔月刊スケールアヴィエーション2023年1月号(通巻149号)	11
VOL.05 何かが空を飛んでゆく…… 隔月刊スケールアヴィエーション2023年3月号(通巻150号)	12
VOL.06 「ここはヨコスカだ!」 隔月刊スケールアヴィエーション2023年7月号(通巻152号)	13
VOL.07 PURSUIT! ……それは…… 隔月刊スケールアヴィエーション2023年9月号(通巻153号)	14
VOL.08 —正体解明— 隔月刊スケールアヴィエーション2023年11月号(通巻154号)	15
VOL.09 —ヨコスカ嘶— 隔月刊スケールアヴィエーション2024年1月号(通巻155号)	16
VOL.10 蓋し星の音?—しし座流星群— 隔月刊スケールアヴィエーション2024年3月号(通巻156号)	17
VOL.11 あざつての感覚—未知の受容体?— 隔月刊スケールアヴィエーション2024年5月号(通巻157号)	18
VOL.12 世界速度記録(車) 隔月刊スケールアヴィエーション2024年7月号(通巻158号)	19
VOL.13 世界速度記録車—あのMG— 隔月刊スケールアヴィエーション2024年9月号(通巻159号)	20
VOL.14 世界速度記録車—ランドスピードレコード LSR— 隔月刊スケールアヴィエーション2024年11月号(通巻160号)	21
VOL.15 世界速度記録者(車)の気概 隔月刊スケールアヴィエーション2025年1月号(通巻161号)	22
VOL.16 そんな甘い目論見で 隔月刊スケールアヴィエーション2025年3月号(通巻162号)	23
VOL.17 シュナイダー・カップ・レース 隔月刊スケールアヴィエーション2025年7月号(通巻164号)	24
VOL.18 シュナイダー・カップ・レース その2 隔月刊スケールアヴィエーション2025年9月号(通巻165号)	25
VOL.19 架空機—SUPERBIRD— 隔月刊スケールアヴィエーション2025年11月号(通巻166号)	26
<b>スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ</b>	27
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第3回 SFマガジン 1978年12月号(通巻242号)	28
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第4回 SFマガジン 1979年1月号(通巻243号)	29
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第5回 SFマガジン 1979年2月号(通巻244号)	30
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第6回 SFマガジン 1979年3月号(通巻245号)	31
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第7回 SFマガジン 1979年4月号(通巻246号)	32
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第8回 SFマガジン 1979年5月号(通巻247号)	33
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第9回 SFマガジン 1979年6月号(通巻248号)	36
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第10回 SFマガジン 1979年7月号(通巻249号)	37
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第11回 SFマガジン 1979年8月号(通巻250号)	38
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第16回 SFマガジン 1980年1月号(通巻256号)	39
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第18回 SFマガジン 1980年3月号(通巻258号)	40
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第19回 SFマガジン 1980年4月号(通巻259号)	41
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第20回 SFマガジン 1980年5月号(通巻260号)	44
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第21回 SFマガジン 1980年6月号(通巻261号)	45

スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第22回 SFマガジン 1980年7月号(通巻262号)	46
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第23回 SFマガジン 1980年8月号(通巻263号)	47
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第24回 SFマガジン 1980年9月号(通巻264号)	48
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第25回 SFマガジン 1980年10月号(通巻265号)	49
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第26回 SFマガジン 1980年11月号(通巻266号)	52
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第27回 SFマガジン 1980年12月号(通巻268号)	53
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第28回 SFマガジン 1981年1月号(通巻269号)	54
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第29回 SFマガジン 1981年2月号(通巻270号)	55
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第30回 SFマガジン 1981年3月号(通巻271号)	56
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第31回 SFマガジン 1981年4月号(通巻272号)	57
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第32回 SFマガジン 1981年5月号(通巻273号)	60
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第33回 SFマガジン 1981年6月号(通巻274号)	61
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第34回 SFマガジン 1981年7月号(通巻275号)	62
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第35回 SFマガジン 1981年8月号(通巻276号)	63
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第36回 SFマガジン 1981年9月号(通巻277号)	64
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第37回 SFマガジン 1981年10月号(通巻278号)	65
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第38回 SFマガジン 1981年11月号(通巻279号)	68
スタジオぬえのスターシップ・ライブラリ第39回 SFマガジン 1981年12月号(通巻280号)	69
<b>THE ADVANCED APSARAS アドバンスド・アプサラス</b>	71
STAGE 1 月刊コミックノイズイ1988年12月号	72
STAGE 2 月刊コミックノイズイ1989年1月号	77
STAGE 3 月刊コミックノイズイ1989年2月号	82
STAGE 4 月刊コミックノイズイ1989年3月号	86
STAGE 5 月刊コミックノイズイ1989年4・5月合併号	92
STAGE 6 月刊コミックノイズイ1989年6月号	96
STAGE 7 月刊コミックノイズイ1989年7月号	102
STAGE 8 月刊コミックノイズイ1989年8月号	106
STAGE 9 月刊コミックノイズイ1989年9月号	111
STAGE 10 月刊コミックノイズイ1989年10月号	117
<b>EXTRA CONTENTS SF MAGAZINE ILLUSTRATION</b>	123
<b>AFTERWORD</b>	126
COLUMN1 宮武一貴とラリーカー ランチアラリー037の話	101
COLUMN2 L.CAto.の話	116
COLUMN3 スーパーバードと須藤ミツアキ氏	122



# 宮武一貴のアド・インエクスプロラータ あさっての空へ

(隔月刊スケールアヴィエーション2022年7月号～連載中)

「スターシップ・ライブラリのようなイラストコラムを描いていただけませんか？」——別件の打ち合わせの最後、そんな唐突なお願いを差し上げたことから始まったのが、「宮武一貴のアド・インエクスプロラータ ～あさっての空へ」である。連載は、飛行機模型専門誌『隔月刊スケールアヴィエーション』2022年7月号よりスタートした。

かつて『SFマガジン』(早川書房)に掲載された「スターシップ・ライブラリ」以来、実に40年ぶりとなるイラストコラム。しかも宮武一貴にとっては初の単独連載である。

「ここだけの話ですが、このページは“治外法権” ですから」——そんなひと言を耳打ちした結果、テーマは(なるべく)航空機、ときどき自動車、さらにはそれら機械を生み出した開発者の思想や、人間の感覚器官にまで自在に広がっていくこととなった。宮武氏がこれまで見てきたもの、感じてきたことを、天衣無縫に語り尽くす場。トークイベントなどで断片的にしか披露されなかった話題の数々こそ、実は多くの人がもっとも聞きたかった内容なのではないだろうか。まさに「いま語っておかなければならない」「いまだからこそ伝えられる」——その思いが、この連載を貫いている。タイトルについて、宮武氏は次のように語る。

「アド・インエクスプロラータ」は、アメリカ・エドワーズ空軍基地の標語のひとつで、訳せば“未知の方向へ”。でも、そんなに格好いいものじゃないんです。まじめなだけでは面白くないし、僕自身も何をやるのか正体がわからない。だから“～あさっての空へ”とつけました。どこに辿り着くのか、着陸点もわからない。そこがいいでしょう？」

なお、「宮武氏にとって航空機とは？」と問うと、思い浮かぶのはXB-70ヴァルキリー、SR-71ブラックバード、そしてX-15の3機だという。なかでもXB-70の美しさは群を抜いている。ほぼ同時代、航空雑誌の誌面に現れたそれらの機体は、「ここまで到達したのか」と思わせる技術の頂点であり、同時に尽きせぬ憧れの象徴でもあった。ゆえに、連載第1回のテーマが自ずと決まったのは言うまでもない。ちなみに、本連載の構想段階で「絶対に描く」と心に決めていたのが、Vol.5から4回にわたり展開された“バード・オブ・プレイ”である。そこにいるはずのない機体が、確かに存在したという事実。しかし横須賀の住民は、それをさして気にも留めない。「ああ、何か飛んでいるな」——その程度の感覚だという。アメリカ第七艦隊の母港を抱える街とは、そういう場所なのだと言ふ宮武氏は笑う。



『猫のゆりかご』というSF長編がある。作家カート・ヴォネガットにJr.があった若い頃の小説だ。書名“CATS CRADLE”の直訳は“あやとり”だが、ここは僕の恩人で“旧・一の日会【※2】”の先輩である翻訳家、伊東典夫氏の名訳『猫のゆりかご』で行く。下手に要約すると身も蓋もないが、気●い博士と、その娘達による世界破滅物だ。因果は糾える縄の如し、色々あって見事に世界が破滅してゆく、皮肉に満ちた傑作だ。僕は一の日会で鍛えられたSFの関係者第一期生らしく、まあ多少の皮肉屋に成り果てて『猫のゆりかご』が好物だった。それはともかく、人の世には“縁”なる美しい“ゆりかご”が確かに絡んでいる。僕は二代続けて頼る者のない一人っ子で、ホントに色々あって妻を失い家が焼けて……今と比べてみると、その……どこでどうやったらこうなってくるのか、縁の力は有難いというか空恐ろしいというか、考えもつかぬ方角から様々な援助の手を差し伸べて貰えて、もうXYZ軸+あさっての方面にも感謝を伝えるしかありません。仔細はともかく、スケールアヴィエーション誌にもお声を掛けて賜り、多種多様な資料や洋書が焼け失せたなかで、こうしてヘンテコな連載を始められる事と相成りました。皆

さん、ありがとう！

さて、僕も企画屋ぬえの一匹としてアニメ『超時空要塞マクロス』で馴染みの深いVF-1の縁もあり、コレを最初にやらんでどうする！と《XB-70 ヴァルキリー》で始めます。僕を航空マニアに誘った最初の女神。遥かなエドワーズの空に想いを馳せた、あの巨大な三角可変翼の機体を描かなければ……。

XB-70はICBMとAAMが未発達だった当時、成層圏を3マック【※3】で飛んでソ連に核爆弾を嘯ますぜと、米空軍とノース・アメリカン社が企んだ世にも美しく恐ろしい爆撃機だ。まあ、コング少佐のB-52のようなマネだけはしないで済んだXB-70だが、その何もかもが突き抜けた桁外れの存在は、あまりにも多くの夢と苦闘と挫折と、数知れぬ崇拜者とを投下して、彼方の空へと去っていった。航空機に限らず、乗り物の進化は材料工学の闘いの歴史だ。旧来の素材と設計に安住していたら、船も車も飛行機も家も未来などない。XB-70は高強度の複合素材がまだない時代に不可能へ挑んだ機体だった……から、まあ筆舌に尽くせぬ困難を抱え込んだのは当然だ。3マックの熱の密林はた易い相手のハズがなかったのだ……。 (次号に続く)



ヴァルキリー1号機は現在オハイオ州デイトンのライバートン空軍博物館で余生を送っている。僕が取材に行った時にはエアロニで陽を浴び再塗装を待っていた。博物館員に見に行きいっかと言われたらOKだと言う！周りで写真を撮り捲っていたら、十二か 白い物がライバートン降ってくる。



ヴァルキリーの引いた意味！僕は夢中で拾い集めた！！

もちろん三角翼は、この上なく複雑な形状を持っていた…素晴(過ぎて)胸の鼓動が治まらなかつた…

注1 タイトルのアド・インエクスプロラータタイトルは、とある空軍基地の標語です。色々な意味で僕の生きる縁となっています  
 注2 一の日会 東京で一のつく日に定例会を行っていたSFのプロ、ファンごた混ぜの集まりでした  
 注3 3マック マッハ3のこと。マックが原音に近いため、以降この連載ではマックと表記します

4機としてU.N.SPACYのVF-1Aを2機…僕はこういうシーンを見たかったね。

VF-1は反応エンジンなのでXB-70と出力は大差ないかも

ヴァルキリーは3マックを出す空力加熱で(圧縮熱)…摩擦熱ではない…塗装がボロボロに

削げて、173分毎に再塗装が必要だった…不可能に挑むというのはそういう事だ。機体はどのみかにも大変な応力を受けて技術者達が涙を返すほどのダメージを受けて戻ってきた…世界外伝戦争を終えたとレベルアップのようを…

NORTH AMERICAN XB-70 WALKYRIE

# NORTH AMERICAN XB-70 WALKYRIE Vol.2



\*まだ防眩塗装前なので機首までモデルは全面きんぎら。白色の耐放射線塗装を施していない。主翼の可変ヒンジも黒くなく、あちこちいるいる印象が初公開時と異なり、不思議な感じがする。ロールアウト前にモデルが造られていたとは、きり解る。機首のラインと本機は違くない。と思うが、よくある事だ。下イーストインプレッションと実機の違いについては、僕の分野でもあり、何時まで言うしなくて、思っている。

.....これほど大変なものを描いたことがない.....

がんばってください  
こわいです.....

\*巨大な可変翼は、実に大きく変化するので、興味が尽きない。

\*プロのモデルさんの公報写真.....

.....勿論、きれいなだけ、どうにも印象で勝てない.....

注1 プロのモデルさん  
件の[X-B70]とは別の書籍に掲載された、プロの女優によるプロモーション写真  
注2 荒々しい女神  
前回と今回の塗装のハゲチョロケたXB-70のこと。資料にした写真は元がコピーですが、僕個人の資料の燃え残りの中で生き長らえていました。さすがに恐ろしい物があります.....

**物** 書きや絵描きは仕事から、資料マニアになり、家中が本や写真集で埋まっている人が大半のはずだ。火事に逢った僕の百年物の家も、本で寝るところがないほどだったが、火で失くした洋書の中にはとんでもない物もあった。『X-B70 ヴァルキリー』、書き間違いでも誤植でもなんでもない。写真集の分厚い表紙には堂々と、XB-70ではなくX-B70とあった。著者も編集者も校正なる用語を知らなかったのか。のちに慌てて直したのか、火事のあと、SA編集部がいくら検索しても件の写真集についてはヒットしなかった。まあ表紙の写植がね.....で済めばまだしも、中の写真にも大変なものがあったのだ。

当時も今も同じだろうが、軍用機の広報写真では、コスチュームを着たキャンギャルを使うことはまず無い。ところがXB-70は途轍もなくEXCLUSIVEだったせいか、神話のヴァルキリーの姿の薄着の女性、身の丈

ほどもあるXB-70の銀色の美しい模型を持って立っている写真が撮られていたのだ。

それだけでも途方もなく貴重なのだが、このヴァルキリーの女神さん、じつは少しもモデルらしくなく.....こう申しては失礼だが、キャンギャルの必要条件“若くて美人”を満たしていなかった.....。言うなればノースアメリカンエアクラフト社の(当時はまだロックウェル社と合併前の筈)社長(若しくはCEO)の令夫人か令嬢か.....おそらく前者が「その役、あたしがやる!」.....誰も反対できなくて、妙齢の美しい御姿が残ってしまった。つまりは黒歴史の如き物だった。ま、不名誉かどうかは別として、ノースアメリカン社の名誉のために言い添えれば、しっかりとプロのモデルによって記録された別の写真をSA編集部が見つけて出してくれている。フウ、よかった.....一時はどうなることかと.....。【※1】

まあこちらも絵描きなので、女性の肖像画は専門外だが、こんな機会も二度とあるまいと思い、記憶を頼りに描いちゃうことにした(とても正確とは言えません)。ついでに現存するモデルさんのほうも描いこう。

それから華やかな女性の方々のあとでなんだが、苦闘の跡も生々しい、飛行機のヴァルキリーの姿もひとつ.....。僕にとっては、この荒々しい女神こそ【※2】、美しいXB-70の真実の姿だと思うのだ.....。

(この項とりあえず終る)

# 熱

の壁との熱闘に挑んだ姐さんよりひと世代前のお嬢さん方は、非力なエンジンで音の壁に向かっていった。後退翼や三角翼など工夫の限りを凝らして、気難しい遷音速域の大気との折り合いの付け方に呻吟していたのだ。

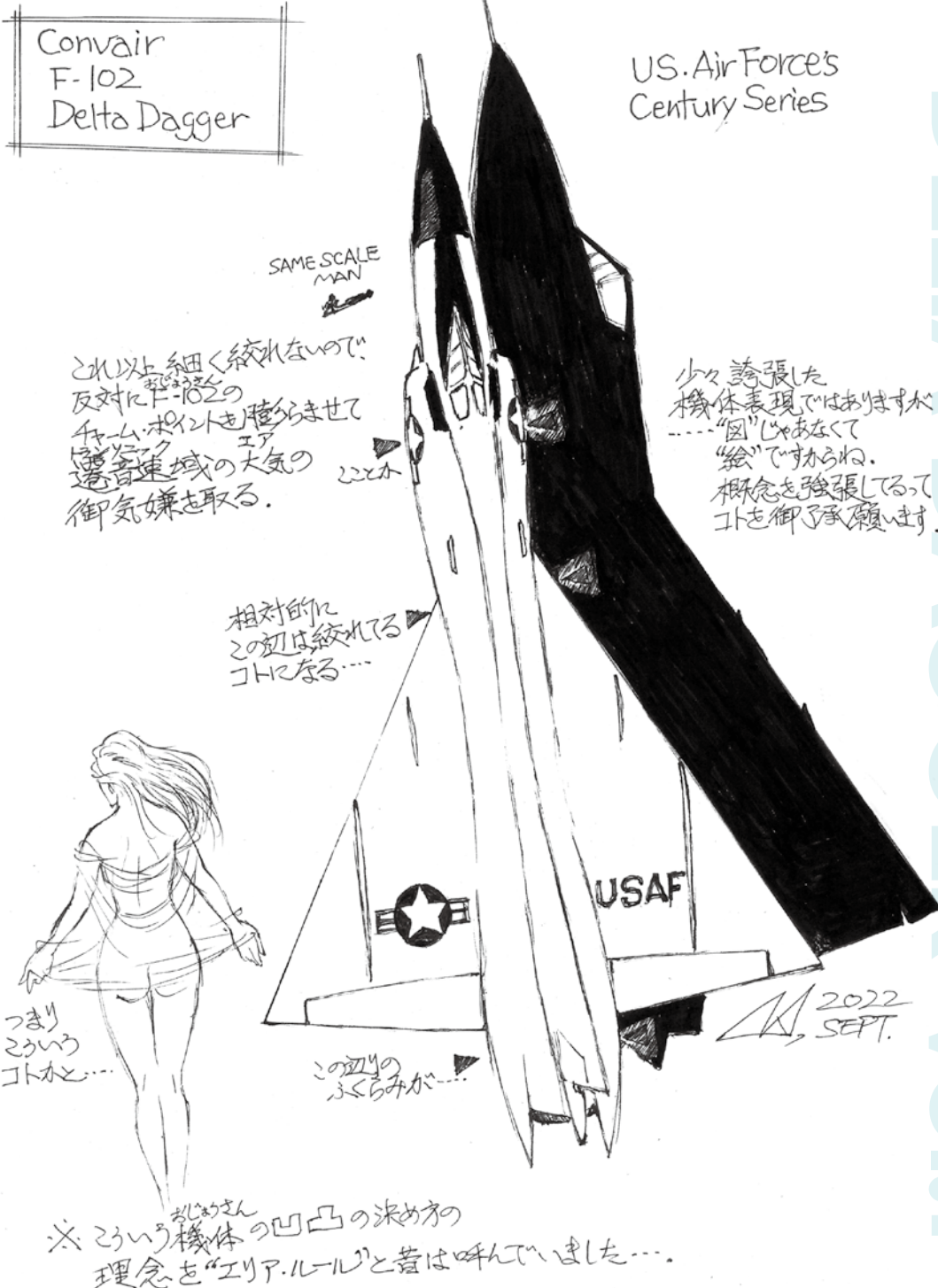
空気抵抗の不連続な増大や層流の剥がれ、翼端への流れなど、超音速に様むには難問はいくらでも出てくる。要は幼いジェットエンジンの推力不足が由の苦勞話だ。例えばC・イエーガーの音速突破で名高いBELL・X-1はロケットエンジンの大推力で壁に穴を開けていた。が、ロケットは瞬く内に燃え尽きる。超音速で闘うには、アフターバーナを使ってさえまるで非力だが息は長いジェットで“音の壁”を乗り越えてゆくしかない。

さて、科学者と技術者達は割り頭が良く、不機嫌な大気なる連中の手玉に乗り方と壁の遣り過ごし方をお嬢さん方に教え込んだ。まあ、女の魅力の磨き方だ。CONVAIR・F-102デルタダガーという戦闘機がいて、始めは胴が少々太めでもさっぱり垢抜けずに、遷音速域の大気のお気に召さず、音速を超えさせて貰えずにいた。最新の三角翼を使って空気抵抗を減らそうと

したが、遷音速→超音速域ではもうひと工夫必要だった。航空機は人が乗り、貨物と燃料を積み、エンジンを支える胴体と、その胴体を浮かす主翼の、ふたつの絶対必要要件をそれぞれ本気で設計してはいた。

が、風洞に入ると、遷音速では計算以上に空気抵抗が急増する。胴と翼を互いにこれ以上譲れないところまで絞り込んだのだが……いや待て……技師たちは考える。別々に詰めて合わせるのが不味いんじゃない……(筆者の憶測ですよ)。機軸に添った断面形で見ると、胴と翼の出会いところで断面積が一気に増大する。……これか……空気さあ、機体をもっと優しく撫でてやれよ……そうと判れば遣りようはある。女の子のかわいさはほそいだけか? イェーガーを見てみる。X-1はグラマラス・グラニスだぞ。出るところは出てるもんだ。これで目が醒めた技師達は、F-102の主翼より前にあるエアインテイクを豊かにし、三角翼の末端にあるジェットノズルの両脇にバルジを取り付け、女の魅力を増大させた……。

ぐっとグラマラスに変身したF-102は事も無げに遷音速域を遣り過ごし、超音速の住民となった……。(この項、続く)



Convair  
F-102  
Delta Dagger

US Air Force's  
Century Series

SAME SCALE  
MAN

これ以上細く絞れないので  
反対にF-102の  
チームポイントも腫らませて  
遷音速域の大気のお気に  
御気嫌を取る。

少々誇張した  
機体表現ではありますが  
……“図”じゃなくて  
“絵”ですからね。  
概念を誇張して  
それを御了承願います。

相対的に  
この辺は絞れる  
ゴトになる……

つまり  
こういう  
ゴトかと……

この辺りの  
ふくらみが……

※ こういう機体の凹凸の決め方の  
理念を“エア・ルール”と昔は呼んでいました……

DELTA  
DAGGER  
Vol.1  
CONVAIR  
F-102



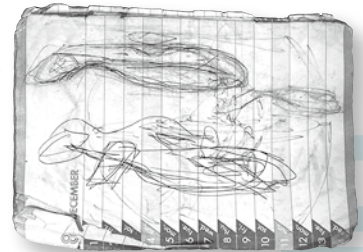
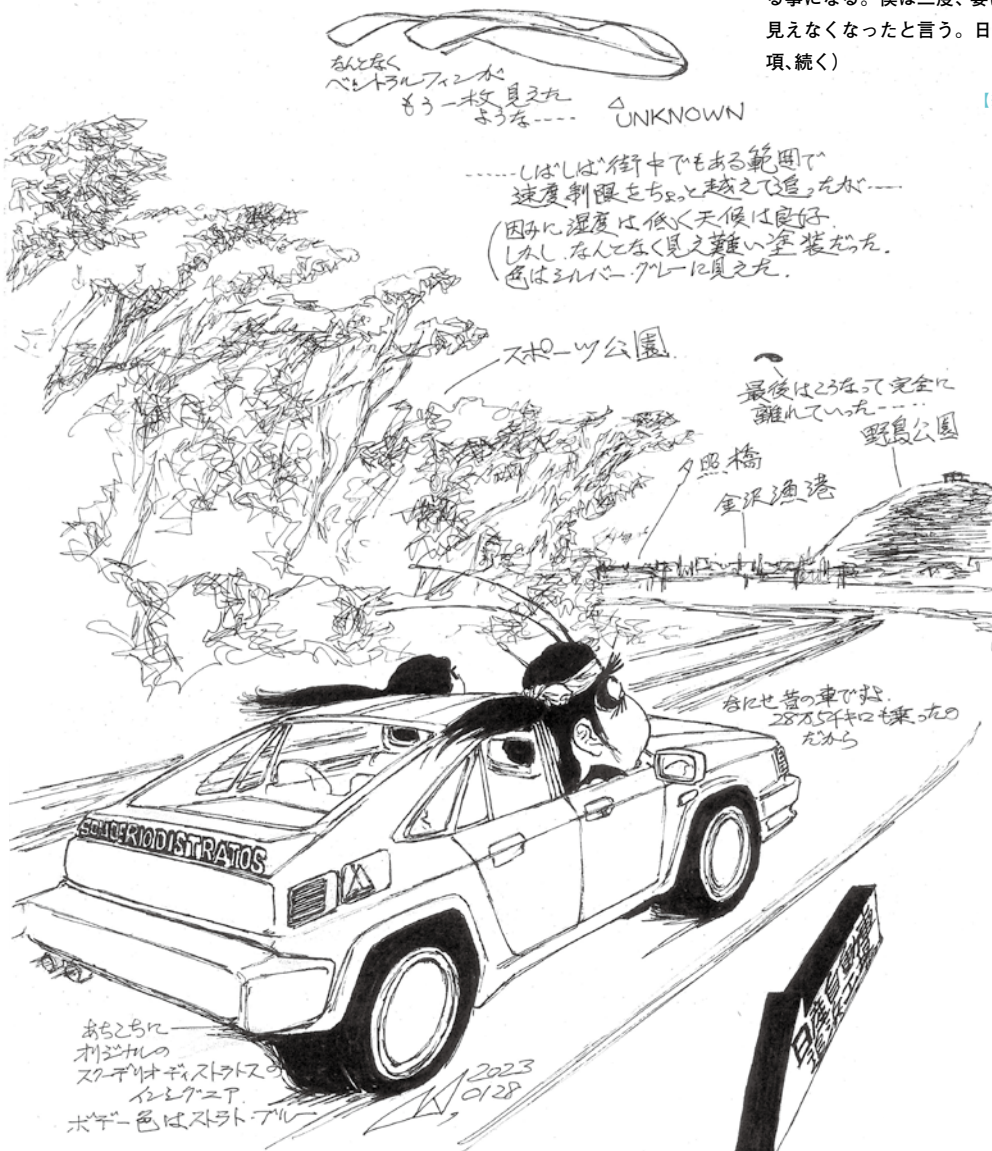
**正** 確な日時を記録する意志は全くないのでそれが何時目撃したものか何の証拠にもなり得ないし、記録感覚(センスの類)は今も変わらず皆無に等しい。正直、僕は記者でも学者でもない。無理して言及すれば、僕と妻が杉並の部屋を出て郷里の横須賀へ転居したのが阪神淡路大震災只中の1995年1月17日頃だったので、それから五、六年程の事だろう。

その日は横浜の中華街で食事をし、シルクロード大通りで行きつけのエスニック雑貨店『チャイハネ』で買い物をしようと、妻と愛車の日産オースター ユーロハッチ typeBで日産追浜工場の前を走っていた。その時のコトだ。国道357号へあと少しの辺り。僕は空に浮かぶ見知らぬ飛行体に目が行ってしまった。「アレ、見えるよね」妻のL.CAtoに聞けば、彼女も目を凝らし「見える。ナンだろう」自慢ではないが僕も妻も一応航空機マニア。割りりと濃い人間だ。大抵の機種は知っている……積りだった。小さな機体で僕等と同じ横浜方面へゆっくり飛んでいた。幸い道は空いている。

ポーチから手帳を出し運転しながらスケッチ【※1】した。「こう見えるよね」「うん、こんな形。ほかの角度を取らないかな……」なぜか機体の角度は全く変わらない。……それがポイントだったのだ。そのスケッチは今でも残っている。「エンジン音がしないのよ。動力で飛んでる感じがしない」高度は300フィート以下、遅い。オースターの倍程度か。

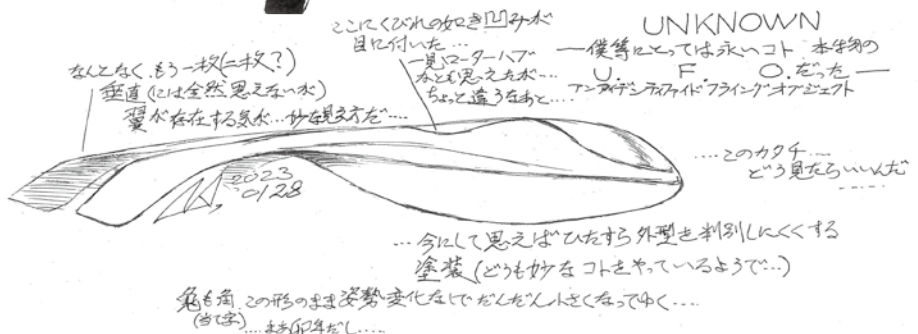
「追うぞ!」「エエー。流石に飛行機だよー」「少しでも情報を探ろう」結局はだんだん離されてゆき、横須賀と横浜の境近くの夕照橋で小さな点になった。最後まで機体の角度は同じままだった……。

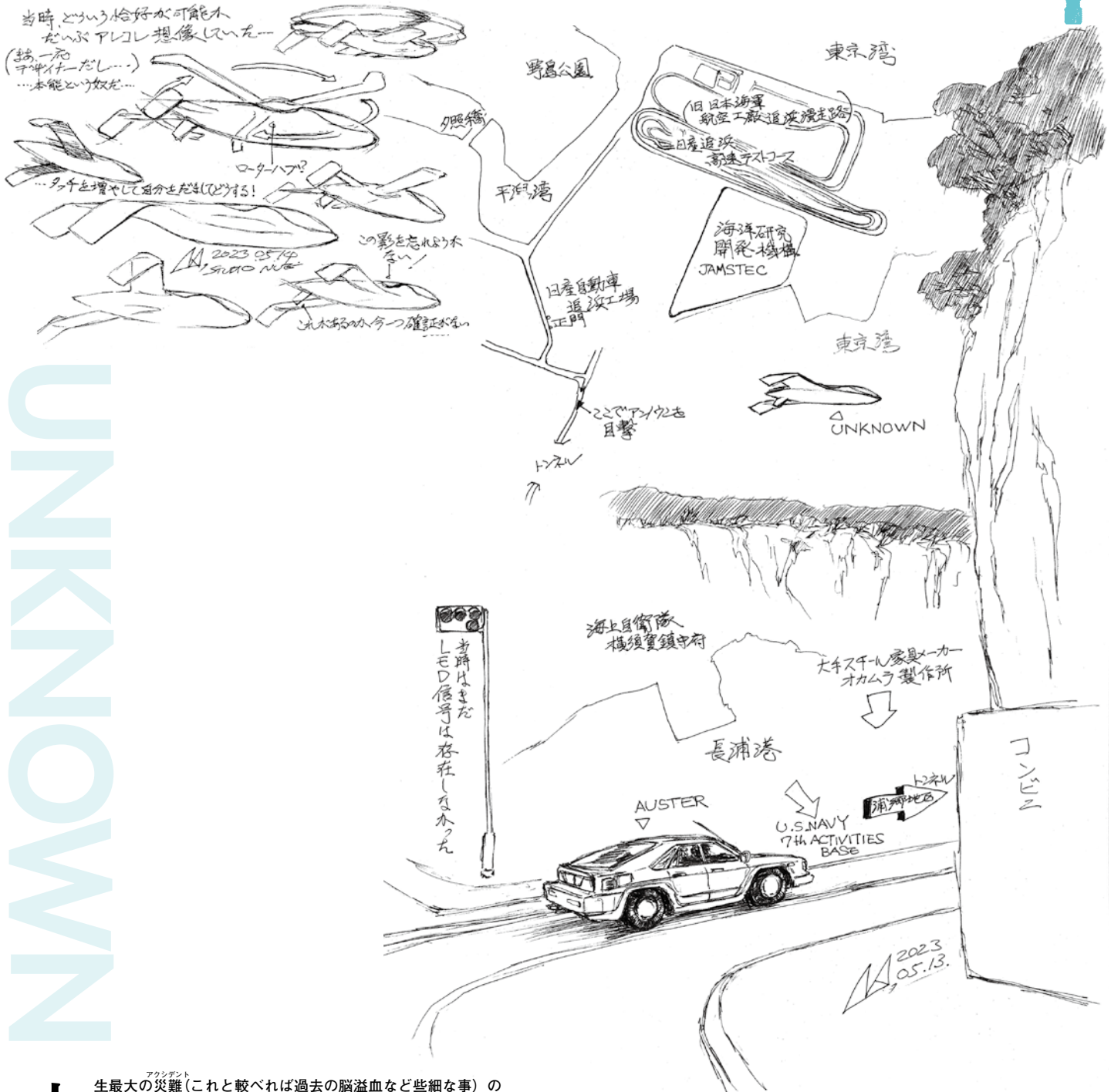
僕等はSFファンの定例会『クリコン』【※2】でその経験を喋り捲った。松崎健一や河森正治とか十数人の仲間のほか、難しい顔の航空宇宙評論家で畏友の江藤巖氏も居たが、彼は一言も発せずに、ただ口の動きだけで何かを伝えようとしていた。……ヤバイカラソレ以上喋ルナ……ドナルカワカラナイゾ……僕は気にもしないで大声で捲り続けた。……それから日を置かず、僕とL.CAtoは横須賀で、その明白なU・F・O・を何度も目撃する事になる。僕は三度、妻は四度だ。僕が振り向く間もなく高度を下げて見えなくなったと言う。日産追浜工場の向こう側辺りだった……。 (この項、続く)



【※1】

注1  
実際のスケッチがこちら。火事での消失も免れた  
注2  
正式名称はクリスタルコンベンション。第1回は1978年12月、東京・本郷の旅館「朝明館」で開催された





UNKNOWN

人生最大の災難(これと較べれば過去の脳溢血など些細な事)の後、少しは落ち着いた積りでいたが、いざ大版のカラー画を描こうとして問題続出。全然話にならず、SAに頼んで一回休ませて頂いた次第。皆様申し訳ない。

で、件のアンノウン、あれから立て続けに見たのだ。二度目も日産追浜工場上空。彼奴は東京湾湾口へと飛行しており、僕らの車と同じ向きだが、直後に入り組んだ崖の連なる浦郷地区へと入ってトンネルもあり、視界が失われて追跡は終わった。が、僕等も頭はあり、物を推測もする。例のアンノウンの見え方は前回と同じ。当初はウルトラライトか自作機とも考えた。実際、当時の自作機でも『クイッキー』や『ベリ・イージ』など、元NASAの天才技術者パート・ルータンが物した傑作機が色々ある……。がヨコスカなる他に余り類を見ない土地柄まで考えれば『軍用機』の可能性もある。未公表の試作機? 二回見たのも日産追浜工場の上空だ。あそこは長い直線のある日産車の高速テストコースで目隠し堀の中を、WSPCなどのプロトタイプカーが疾走していた。R380やR381、R382などの名車を育んだ場所だ。が、週れは大戦時の海軍航空工廠とその滑走路に行き

着く。高速爆撃機『銀河』を開発していた土地だ。そのまま海上へ出れば横須賀鎮守府が目。その先には米海軍第七艦隊基地が広がる。アンノウンは日産テストコースから飛び立ったのでは? 充分に怪しかった。思えば僕等がかつて住んでいた杉並区の荻窪に近い青梅街道の脇、桃井という地に当時は日産プリンスの本社があり、日産ミサイル部門のメイン工場がそこで操業していたのだ(後にIHIへ移管)。聞けば追浜テストコースで富士重工の電力航空機のテストを行っていたと言うし、縁は全然切れてもいない。横須賀の隠された荒ぶる魂が、その末端を露にした形だ。しかし、件のアンノウンは横須賀で何をしていたのか? 勿論、鍵は横須賀鎮守府の自衛艦隊と米海軍第七艦隊にあるのだろう。全く推測に過ぎなかったが(当時は……ね)、何かの試験か実験かをやっているぐらいは予想がついた。妻のLCAtoだけが目撃し、僕は間に合わなかった三回目の邂逅でも、彼奴は追浜テストコースへ降りたのに違いなかった。

そして機会はもう一度訪れる。推測は確信へと変わるのだ。

(この項、続く)

**僕**等は週に三度の三浦半島周回ドライブに出掛けていた。海洋と樹林の自然の気を取り込む……まあ気分転換だ。毎回道順を逆にしており、その日は自宅から東京湾口へ、国道16号で防大の崖下を通り観音崎、浦賀ドックへと廻り込むつもりだった。猫のマルはお留守番。妻と僕とオースターが防大下の走水水源を抜ける所で件の彼奴が現れた。高度五十m程をなぜかゆっくり、僕等と同じ湾口を目指している。「追うぞ!」「いっけー!!」これまで以上に近く、速度差も無かった。

水源の桜並木の下を追い距離を詰める。詰めたのだ! 国道16号は走水の岬へと海拔を増し、彼奴に近付く。この先の岬の頂点で道は急角度に右へ折れ、急な下りとなって海岸へと降りる。ラリーカーでもないし、僕等は減速してブラインドコーナーへと向う。と、崖の向う側から大きな爆音と米国製でない馴染みのない機械音がした。「ヘリのギア?」妻のL.C.Atoが呟く。その途端、目の前に大型ヘリが飛び出した! 「シュベルプーマ!?」彼奴と僕らの間に文字通り割り込んだのは、ほんの数機しかない苦の政府専用機。要人輸送用の機体で、一瞬だが窓の中に十人程の背中

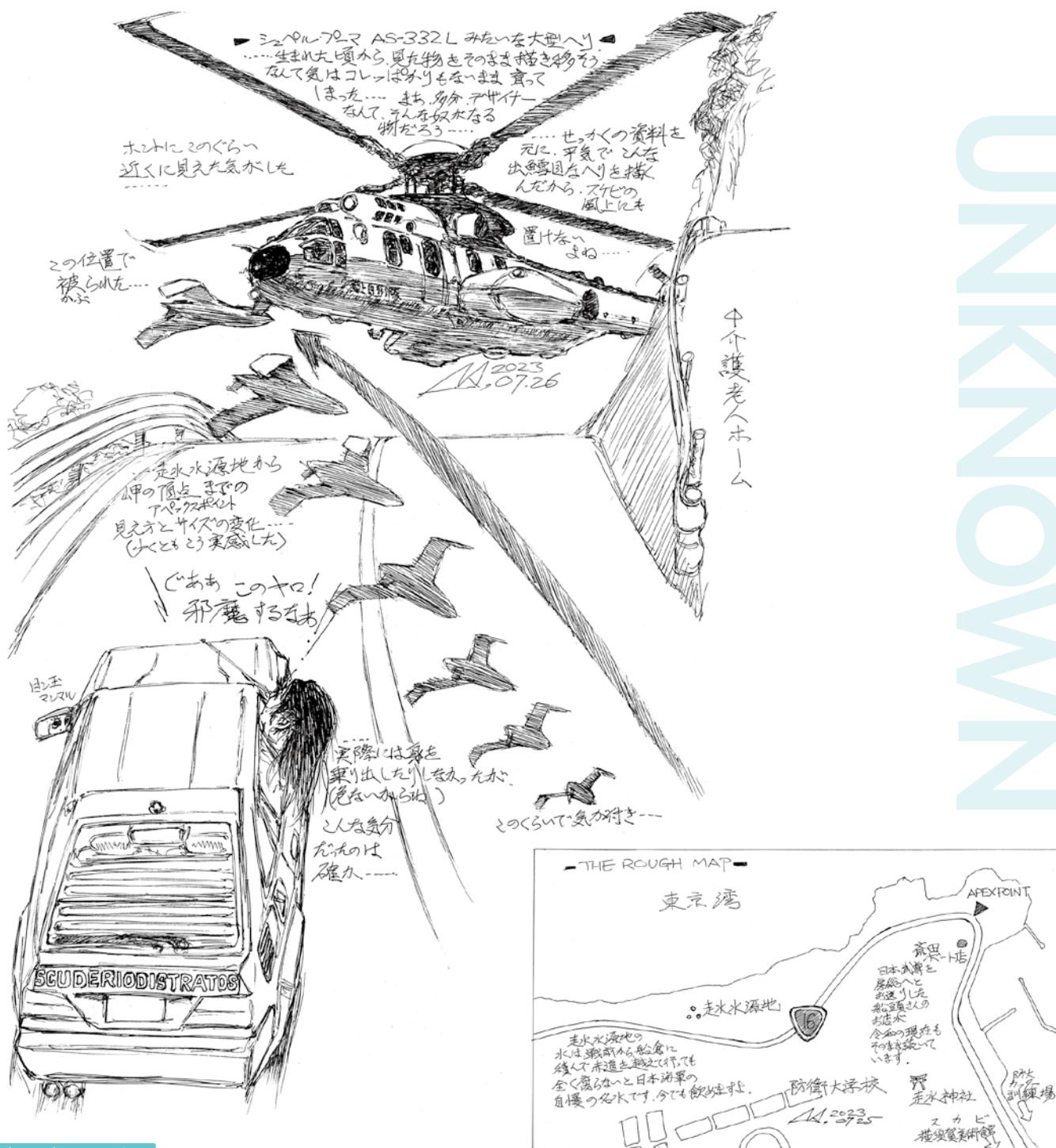
も見えた……。引き伸ばされた時間感覚の中に幾多の事態が詰め込まれ、大型ヘリがヨーロッパ製特有のギア音を残して横浜方向へ飛び去ると、件の彼奴はもう房総半島に近く、遙か遠くの小さな点となってしまっていた。僕等は連続した興奮と喪失感の釣瓶打に茫然とし、意気消沈したのかどうかもよく判らぬまま、急坂を下り、走水神社の前で相手を打って、溜め息をついた。

防大カッター訓練場の脇をゆっくり流しながら「あの要人輸送機……国会議員が乗っていたな……」「やっぱりそう思う? 自民党の防衛族」「モロにあの機体を視察に来てたんだ。さもなきやあんな低い所を飛びやしないだろ。何だったのかなア、アイツ……」。

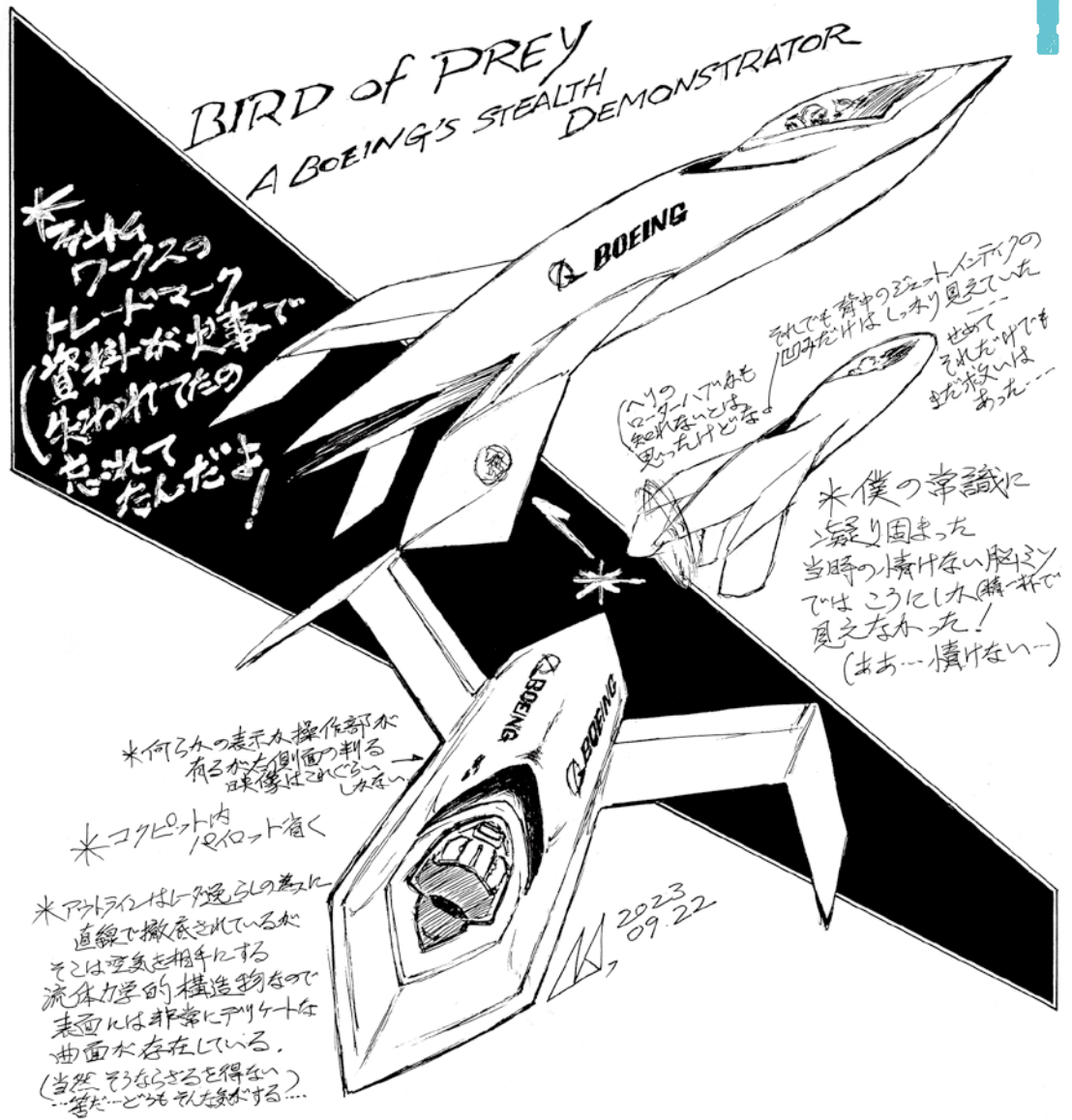
……もう二度と会う事はないと、頭の芯が告げている。今回の三度目の邂逅(妻は四度目)で総ては終わったのだと思った。横須賀という特殊な空間の真の姿と、世界に対する日本というかなり尖った地域へのそれなりに深い理解を僕らに残して彼奴は飛び去ったのだ。

そして、その解答は聴て訪れる……。

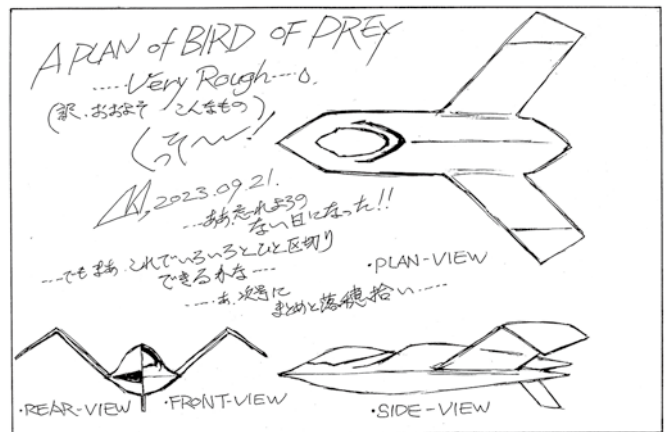
(この項、続く)



UNKNOWN



**「宮** 武さんが以前話していたモノと思われる機体載っていますよ」  
 報せはSFCA会員の友人……X-15やXB-70のマニアでインテリゲンシア・スピードフラッグ・ロケットジョーカー・CARTとボンネビル・ソルトレイクの世界速度記録車好き(確か)の須田君から齎された。靈感の強い男で何かピンと来たらしい。「2003年1月号(No.601)航空ファンです」。一目見て「これだ!」と感じた。ボーイングのステルス・デモンストレータ「バード・オブ・プレイ!」まず自分に無性に腹が立った。僕の目は節穴だった。御負けに鱗が嵌まっていたのだから救いようがない。その場で新作の諺「節穴から鱗」ができたが全然嬉しくなかった。彼奴の正体が知れた事より、常識に曇らされていた我が眼と脳の無能さにガクッリ落ち込んでしまった。ファンには「物事の本質を見抜け!」と大層な大口を叩いていたのがコレだ! ステルス電波学の本質も見抜けず旧態依然とした古臭い航空力学的曲線を頭の芯に巢喰わせていてなにがメカニカルデザイナーだ!! 差がつかさった。もう、最初に追浜日産工場前で追跡した時のスケッチからして駄目だった。「なんの先入観も持たず見たそのままを描く」。スケッチの基本もできていないじゃないか! あのスケッチのどこに角張ったエッジがある。これでは当時の内外のプラモデルメーカーと全く変わらない! 眼から光が入っただけでは人間は見ただ事にはならない。脳が処理しようやく、物が見えるのだ。脳が処理を失敗したら終り。只の見間違いだ。レーダの電磁波をスルーさせる仕掛けの形に、僕の眼が騙されては話にならない。ボーイングの嘲笑う声が聞こえる気がした。正にそのための技術なのだ。それもデモンストレータ! わざわざ関係筋に見せるための機体だ。してやられた。



航空ファンの記事では飛行試験が1999年まで40回近く続けられたとある。そして公開は2002年10月だ。その3年間に、彼奴は世界を巡って軍事関係筋の顧客に見せて廻り、あちこちの基地上空を飛んでレーダで追尾させ、「ほら、全然映らないでしょう。東側もこれを開発している。貴方の国でも我社の技術を導入しないとエライコトになりますよ」とやっていたのだ。横須賀鎮守府と米海軍第七艦隊基地にもそれに来ていたのだ。追浜の日産工場高速試験路を臨時の滑走路に使って……。 (この項、続く)

ISBN978-4-499-23445-0 C0076 ¥4500E



9784499234450

定価(本体4,500円+税)



1920076045004

# MIYATAKE KAZUTAKA'S AD INEXPLORATA

宮武一貴のアドインエクスプローラ 明後日の空へ

U.S. Air Force's  
Century Series

SAME SCALE  
MAN

20001

USAF

2022  
SEPT.

本書は、見本にて  
展示された模型の  
製作の様子を、  
写真とスケッチを  
交えて紹介する。  
また、模型の製作  
に使用された材料  
や、製作の工程  
についても詳しく  
紹介している。

・機体前部  
・機体後部  
・エンジン  
・機体側面  
・機体下部

・機体側面

・機体下部

・機体前部  
・機体後部  
・エンジン  
・機体側面  
・機体下部

・機体側面  
・機体下部

